

# 社会福祉法人カリヨン子どもセンター News Carillon No.56

大丈夫。一緒に考えよう。  
ひとりぼっちじゃないんだよ。あなたは大切な人。

## 子どもシェルターの名称が新しくなりました！

カリヨン子どもの家ガールズは…

### カリヨン茜の家

植物の「茜」のもつ、赤、お日さまなどのあたたかいイメージのように、みんなをあたたかく受け止めるホームになっていきますように。

カリヨン子どもの家ボーイズは…

### カリヨン木かげの家

暑さや風雨から守り、一時の休息を与えてくれる木かげ。シェルターがこれからもそうした場所になっていきますように。

多様な生き方、在り方があって、みんなそのまんまでいいよね！ と、思っているカリヨン子どもセンターで、施設名に性別名が含まれているって、しっかりこない、という声がおとなからも、子どもからも聞かれるようになっていました。

そこで、法人設立20周年の節目に、思い切って 名称を変更することにいたしました。新しい名称は、これまでのカリヨンの子どもシェルターの元利用者の皆さん、法人職員や理事たちから募集した名前の中から選出されました。

建物などの環境が改善されたわけではなく、それぞれのホームの生活にすぐに大きな変化がもたらされるわけではありません。受入れ対象、人数、生活スタイルなどをどのように充実させていくのかは、これから取り組むべき課題だと考えています。

新しい名称は次ページからご報告する法人設立20周年記念イベントの中で発表させていただきます。皆さんに親しみ、覚えていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。🙏

国連子どもの権利条約日本批准30周年  
カリヨン子どもセンター設立20周年記念イベント

## ママに、これからも

2024年12月17日（火）赤羽会館講堂

主催 社会福祉法人カリヨン子どもセンター  
後援 東京都北区  
子どもシェルター全国ネットワーク会議  
全国自立援助ホーム協議会  
協賛 日本フィランソロピー協会「誕生日寄付」  
協力 住友金属鉱山株式会社・日本生命保険相互会社

Thank  
you

カリヨン子どもセンターの20年間の歩みは、被害を受けた子ども、若者たちの権利回復、権利擁護、意見表明の機会保障等、子どもの権利条約の理念を基盤にした実践であったことを、音楽で、対話で、ゲストの方々の新鮮な視点を交えながら振り返りました。

平日の夜にもかかわらず、160名を超える皆様のご参加をいただきました。開催に際して、ご後援、ご協賛、ご協力くださいましたすべての皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございます。次ページより、イベントの一部をご報告します。

## あゆみと感謝

理事長 相川 裕

1985年に東京弁護士会の電話相談「子どもの人権110番」が始まり、弁護士が直接子どもからのさまざまな相談にふれるようになりました。1994年に国連子どもの権利条約が日本で批准。子どもの権利条約で語られていることを知って、広げて、みんなのものにしていこうという目的で東京弁護士会の子どもの人権をテーマにした演劇「もがれた翼」も始まりました。今日帰る場所がない、行き場のない子どもたちが、安心して安全に暮らせる場所、そこで心と体を休めて、その後のことを考える場所が必要だという切実な思いを込めて、2002年もがれた翼Part9「こちら、カリヨン子どもセンター」で子どもシェルターの構想が描かれ、市民や児童福祉関係者から、大きな反響を受け、実現に向けた取り組みに繋がりました。



2004年6月NPO法人カリヨン子どもセンター設立、同時に日本で初めての子どものシェルター「カリヨン子どもの家」が開設されました。このときに、東京都の全児童相談所と一時保護に関する協定を締結したことが、その後20年にわたり活動の大きな支えになっています。

子どもシェルターから出た後に、暮らしの基盤を作っていくための足がかりとなる場所の必要性を感じ、2005年4月に自立援助ホーム「カリヨンとびらの家」、2006年3月に自立援助ホーム「カリヨNTAXやけ荘」を開設しました。2008年3月に法人の取り組みをより充実させていくために社会福祉法人へ。2009年3月に子どもシェルター「カリヨン子どもの家ボーイズ」を開設して、従前の子どもシェルターは「カリヨン子どもの家ガールズ」となりました。全国に子どもシェルターを運営する仲間も増え、子どもシェルター全国ネットワーク会議というネットワーク組織がスタート。

2011年2月に日弁連より厚生労働省に対し「子どもシェルターの制度化を求める意見書」が出されたことも後押しとなって、2011年7月子どもシェルターが児童自立生活援助事業の一類型として認められることとなりました。

精神不調をかかえた子どもたちのためのハーフウェイホーム「カリヨンあしたの家」を2016年3月に開設し、たくさんの職員、弁護士が実践に加わってくれましたが、支援が十分にできず、2019年に事業終了となりました。2022年9月、法人本部を北区赤羽の「ろくえもんやしき」に移転させていただきました。

いろいろな方たちの関わりによって、今日のカリヨン子どもセンターがあることに、改めて感謝を申し上げます。いつも現実の子どもたちの声に導かれて、ここまで来ることができました。これからも子どもたちとともに、その声を受け止めながら、同じ志を持ったおとなたちと連携し、驚いたり喜んだり笑い合ったりしながら、少しずつでも「あゆみ」を進めていきたいと思っています。

## ゲスト対談 「ひとりぼっちじゃないんだよ」

認定NPO法人フリースペースたまりば理事長 西野博之さんをお招きし、理事の坪井節子と対談させていただきました。



30年以上にわたって、不登校やひきこもりの渦中にある子ども、若者たちやさまざまな障害のある方たちとともに、川崎市子ども夢パーク、フリースペースたまりば、フリースペースえん、川崎若者就労・生活自立支援センターブリュッケなど、地域で育ち合う居場所を創設し続けてこられた西野さん。活動の原点は？

学校に行くことができず、泣きながら「僕はおとなになれない」といった少年との出会い。大勢の子どもたちが、学校に行けないことを苦にして、生きるか、死ぬかというところを追い詰められているという現実には衝撃を受けた。けれども、学校以外の居場所、生きていくための居場所を作ろうというのは、家庭、社会、地域さまざまな要因が入り組み、正解のない問いに立ち向かうようなもの。自分の無力さに打ちのめされ、途方に暮れることの繰り返し。その子の思いを受け止めて、丸ごとの存在を肯定して、どうしたらよいかわからなくても共に居続ける、自分の価値観が子どもたちに揺さぶられる日々で、自分の当たり前を疑わない限り、子どもの横にもいられないと思ったよ。



おとなにとっては、価値観の鏡をはがされるのは、つらいんですね。実はそのほうがおとなも楽になるんですけどね。

ただただ途方に暮れながら、何か根拠があるわけじゃないけど、まあ飯でも食おうよ。美味しいものを食べたら元気になるんじゃない？って。時間稼ぎだったかもしれないけど、とにかく一緒に生きていこうよって感じ。

そんな中で、子どもたちから、しょうがないなあって、おとなと一緒にいることを許されているような感じありませんか？

うんうん。空気が変わるとか目線が変わるとかね。一生懸命言葉を絞り出して、この子の命のそばにしようとしたときに、ふと自分も少年時代に苦しかったことを思い出して。目の前にいる子どもに語りかけながら、あの思春期の時代の自分の生きにくさにも、お前生きてていいんだよといわれているような、生き直せたような感じは、子どもたちのおかげ。

私たちが子どもたちにしてあげるとか、支援してるんじゃないくて、子どもたちから貰うほう。

子どもは、オギャーと生まれた瞬間から権利の主体。おとなは、目の前の子どもからいろんなことを許され、自分も元気にさせてもらっているよ。子どもが考え、発信してくれた言葉が空気を変えて、助けられたことなんていくらでもあるよね。川崎の子ども権利条例は、対等にこの社会を構成するパートナーだとしっかり位置づけたんですよ。

少年非行予防のための国連ガイドラインの中に、非行は、幼い時から人権を侵害されてきた子どもたちのSOS。だから、幼い時から子どもをひとりの人間として人権を保障していくことが非行予防の道。そして人権保障とは、おとなが、子どもの対等で全面的なパートナーとして生きることだと示されていますね。

カリヨンの活動で大切にしているのは、生まれてきてよかったね、ひとりぼっちじゃないんだよ、あなたの道はあなたが選ぶの3本柱。これをカリヨンの職員は、言葉で言うだけではなくて、食事をするときも、遊ぶときも、あるいは児相や弁護士たちとこれからのことを相談するときも、姿勢で示し続けてるんですよ。

「たまりば」がやってきたことそのもの！やっぱり似たような苦しい生きづらさを抱えた子どもたちと出会ってくると、同じところに行き着くのかな。みんな、生きてるだけですごいわね。

子どもの権利条約では、意見表明権の保障、アドボケイトになりますが、カリヨンでは、ケース会議に子ども本人が加わることが重要と位置付けてきました。職員、子ども担当弁護士、児童福祉司などの支援者が集まったところへ子どもも入る。自分の人生を考える会議なのに、本人不在はおかしいでしょう？ 子どもは語るときに緊張するし、うまく話せないこともあるだろうけれど、職員がフォローしたり、事前にいろいろ説明をしたり、話し合ったりしておいてくれる。子ども自身がみんなの前で自分が何をしたいか、何がつらいのか、いろんなことを自分の言葉で語り、そしておとなたちが決めるんじゃないくて、本人がどちらの道を選んでいくのか決める！

「夢パーク」の合言葉は「おとなのよかれは子どもの迷惑」。おとなが答えを持っているわけじゃない。「ブリュッケ」では、就労支援しませんと宣言したよ。引きこもっている人は、早く仕事について生活保護から抜けなさい、と基本にされたらどれだけ生きづらいか。自分が生きたい、動きたいって自分の中の欲が出てきたときに、初めて力が出るよね。カリヨンのケース会議で、自分のことは自分で決める、自分が人生の主人公なんだって取り戻すってことはとても大事だよ。

おとなにとっても、本当に悩ましくてわからないときに、子どもから「私はこうしたい」と言ってくれるのはありがたい、現実が切り拓かれるってことだと思うんですね。子どもに船長さんになってもらうと、おとなもすべきことが見えてきて、とても楽なんですよ！

西野さん、ありがとうございました！

## ミニLIVE

もがれた翼シリーズにたくさんのテーマソングを提供しておられる介護福祉士で音楽ユニット「ぱくぱく」よりリーダーのゆうきさんと、カリヨンの職員、理事、ボランティアメンバーによるハンドベルのLIVE演奏が披露され、ゆうきさんの優しい歌声と、ハンドベルのハーモニーが会場に響きました。壇上のフラワーアートは華道家 西拓人さんの作品です。



## カリヨンを利用したことのある若者にインタビュー 「ぶっちゃん、カリヨンってどうよ」

Rさん



カリヨンの子どもシェルターと自立援助ホームを利用。カリヨンとの出会いは16歳。現在は25歳で社会人。このイベントのためにお仕事は有休をとって、2時間かけて新幹線で駆けつけてくれました！

シェルターで一番記憶に残っているのは、なかなか行き先が決まらなかったこと。その間も、家に絶対に帰らないという思いだけは変わらなかったし、その気持ちを職員や子ども担当弁護士は受け止めてくれていました。あとは、職員やボランティアさんとわいわい一緒にご飯を食べたこと。私、パクチーが好きで、パクチー料理をいっぱいつくっていただきました。

自立援助ホームにうつってからは、とにかく働いてました。アルバイトの掛け持ちもしていたし、収入も半分以上は貯金してました。

当時かなりとがって、職員さんにすごい反発してました。高卒資格もってない私に、当時のホーム長さんから、高卒認定試験受けたらと言われたけど嫌だって断って。仕事があるから、カリヨンハウスまで勉強に行けないって断っていたら、学習講師さんが夕やけ荘まで勉強見に来てくれるっていうことになって（笑）おかげで、ホームを退居するまでに全科目に合格することができました。資格はとって良かったと思います。今は仕事がとても楽しくてやりがいがあります。趣味はこれといてないんですけど、よく映画を見ています。

今、昔の自分みたいに苦しんでる子は、相談できるおとなを見つけてほしいですね。おとなたちは、そういう相談をうける環境をもっとよりよくしてほしい。わざわざ都会まで逃げてこなくても、地方に自立援助ホームがたくさんあって、そこへ相談できれば、子どもにとって、今の環境が変わる一歩に繋がると思います。

Sさん



カリヨンの自立援助ホームを利用。現在大学1年生。カリヨンとの出会いは高校1年。入居してしばらく、職員とほとんど会話をしてくれなかったことも懐かしい！

ホームに入って、食事の心配しなくていいし、児童居室が個室だったことが自分的によく、ひとりの時間が欲しいときに落ち着ける、自分にとっては大きな環境の変化でした。生活費や学費を稼がなきゃという焦りもなくなりました。

でも、これまで見てきたおとなたちは、みんな自分を下に見てくるような人たちだったので、最初は職員とも距離をとってました。話し始めたきっかけは……よく覚えてないですよ。いつの間にか、気づいたら、個人的な悩みとかも話すようになってました。

高校はコロナ禍もあって、あまり通学のモチベーションは高くなくて。大学進学なんて、一切考えてなかったんだけど、同じころ入居していた子が勉強熱心で、大学進学を勧められて、そういう選択肢もあるのかあって。

塾に行けるようになって、受験勉強にまい進したけど、受験は結局失敗しちゃって。職員さんがもう1年だけやらせてくれるようになって、浪人生活にはいりました。予備校の模試の結果はかんばしくなかったのに、第一志望に合格は自分でもびっくり！（笑）今は毎日楽しく大学に通っています。自分の希望を聞いてくれた職員さん、いろんな方の支援を受けました。本当に感謝しています。

大学に通うようになって、生活が苦しい中では進学することも、その方法も思いつかなかったなって、毎日食事が食べられる、相談聞いてくれる、お金の心配もなくなってやっと自分の展望が拓けたんだなって振り返ってます。



貴重なお話をきかせてくださったRさん、Sさん  
本当にありがとうございました！  
インタビューの完全版は20周年記念誌（近日発行予定）にてご紹介させていただきます。



## 子どもシェルター カリヨン木かげの家

桜吹雪を抜けると児童相談所だった。叫ぶような話し声が響いた。利用者さんの用事が終わるのをロビーで待っているときだった。エントランス付近の学生さんと児童福祉司さんだった。親族でも施設職員でもない。児福司さん。言い争いをしているのではなかった。テンションが高ただけだった。ちょっと沈黙が通った後で児福司さんが言う。

「いま〇〇さんいるよ」

「会う！ 会う！」

〇〇さんというのは学生さんの前任の担当福祉司だろう。担当が代わったのは今年度かもしれないし去年の4月かもしれない。児福司さんは管轄地域および全国の施設、家庭、病院その他を飛び回っているので所内にはほとんどいない。だから電話してもあまり捉まらない。それが今日は珍しく所内にいるということだ。異動になったけど今日は引き継ぎか何かで例外的に児相にいるのかもしれない。

「〇〇さん！」

〇〇さんがそこにいた。

「☆☆高校合格したんだね、おめでとう」

学生さんは笑って、その場で一周回って見せた、新しい制服を。

「よく似合ってる」

学生さんは〇〇さんに抱きついた。二人は抱き合っただけで動けなくなった。不慮の事故でも起きたのかと心配になるほど動けなかった。学生さんは泣いているかもしれない。ベンチに座ってチラチラ見ていた偶然居合わせただけのシェルター職員の目も潤みそうな光景だったが、現担当司はそんなことはなかった。正反対の表情だった。自分の職責を改めて肝に銘じているのかもしれない。学生さんの支援に困っているのかもしれない。安易な言及はできない表情だった。以上は空想の話です。

児相に保護されて嬉しいことも悲しいこともあると思います。ある利用者さんは「一時保護所で初めてまともな大人、ちゃんと大人やってる大人に会った。人間は大人になるとケノになると思っていた。あのとき保護されてほんとによかった」と言いました。現に今保護を受けている立場上、保護の提供元である児相や施設を賛美しておく方が保護中の軋轢を減らせようという思慮分別にもとづいた発言、ある種のエチケット的な発言という一面はあるでしょう。かといってまるごと社交辞令でもなさそうです。あのとき保護されなかったら自分はようになって

いたか分からない。家族と普通の暮らしができたとは思わない。心身や人間性の重大な危機に瀕していたかもしれない。いや既に瀕していたから児相を受け入れたのだった。人生まだ途中だけど保護されてよかったと断言できる。あのまま家にいたら高校行けなかった。高校の先生が何回も補習やって進級できるようにしてくれて部活の顧問がやればできること教えてくれて〇〇さん(児童養護施設の職員)が話聞いて馬鹿を止めてくれたし奨学金を探してくれた。児相に保護され、施設入所して、10代は死んでも忘れない思い出になったという。それは(鬼のようにバイト代を学費貯金する等の)本人の頑張りがあったからこそなのですが、児相や施設や学校が果たした役割に思いを致すことが出来るほどの心の余裕や視野の広がり獲得できたのはよかったです。

10年以上前の利用者さん。乳児院も少年院も、当時新設の子どもシェルターまで「子どもが行くところは全部行った」という。「だから分かる、ここはいい施設だ。だから俺はここにいるのはよくないと感じる。ここにいたらまた元の自分に戻ってしまう。もう通り過ぎた場所だ、俺はもうこういう気持ちに戻っちゃいけない、こういう場所を居心地いいって思っちゃだめなんだ」

このときシェルター職員が、そんないい施設だと言われるに足る何をしたのかというと、利用者さんと一緒に夕飯の買い物に行った。ついでにジュース買って飲んで本屋で立ち読みした。利用者さん未成年1名(当時は20歳成人)と職員おじやん3名。たまたま他の利用者さんの都合で職員がだぶついたので、みんなでぶらぶら買い物に行ったのでした。もしかしたら他の誰かが当職の知らないところで途轍もなくいい仕事をしていただけかもしれないが。利用者さんが道を歩きながら「子ども1人に大人3人…」と驚いて笑いをかみ殺していたのは覚えています。

一生懸命やった結果が憎悪や侮辱や水の泡のこともあれば、余ったみんなで歩いてるだけで感嘆されることもある。どんな仕事も想像を絶します。児相も弁護士も施設職員も疲れより怒りが取れない。そしておそらく、われわれ以上に利用者さんは。子どもとして年相応に生きようとしただけでちょっと思いつけないようなさまざまな理不尽に遭ってきた。ろくに事情も分からず説明もできない年齢に。その結論が「あのとき保護されてほんとによかった」であり、10代にして児童福祉のサービスに安らう自分を許さない厳しさです。

それで済んでいるのがむしろ驚きです。それは、ここに来る前の施設等で彼ら彼女らが出会った職員たちが確かな仕事をしたからです。利用者さん本人も頑張ったし、前任の担当者さんも頑張った。子どもシェルター職員は利用者さんが前籍施設でどれくらい大切にされてきたかよくわかる、というか利用者さん本人たちが愛惜しつつ話してくれる、子ども時

代の終わりとして。したがって私たちは、ご寄付を頂いております支援者の皆様への感謝と共に、過去に利用者さんと向き合ってくれたたくさんの職員、大人の方々にも感謝しています。どうもありがとうございました。今後ともどうぞよろしく願いいたします。😊

※プライバシー保護のため事実を変更しています。  
(木かげの家 職員一同)



## 子どもシェルター カリヨン茜の家

温かくなり桜も花を咲かせ春を感じたかと思えば雪が降ってみたり寒くなったりと繰り返しながらようやく春らしくなり2025年度が始まりました。

茜の家は2024年12月17日からカリヨン子どもの家ガールズからカリヨン茜の家へと名称を変えての運営となっております。名称変更から3カ月がたち、ようやく茜の家という名称にも慣れてきたところですが、電話をかける際などうっかりしていると「ガールズ」と言ってしまう言い直すこともしばしば……。早く慣れないといけないと思う日々です。ホーム名の由来となっている植物の「茜」のもつ、赤、お日さまの温かさにつながるイメージのようにあたたかく受け止めるホーム、という印象を持ち続けていただけるよう努力し続けたいと思います。

さて、前回のニュースレターで茜の家にはサンタがいるのかと利用者から確認があったとご報告させていただきましたが、茜の家にはサンタさんは……

「いる」のです。利用者の皆さんからサンタさんへの手紙をもらうと、その希望を叶えるべくサンタさんは手分けしてプレゼント探しに奔走します。

今年もクリスマス前日にはプレゼントを用意することができ、無事にクリスマス前夜の消灯時間を過ぎた後にプレゼントをセットし、役割を果たすことができました。そして頑張ったサンタさんへのご褒美は、プレゼントを受け取った利用者さんたちの何とも嬉しそうな笑顔です。翌日出勤した職員にも「これサンタさんにもらったのー」と嬉しそうに報告してくれました。それからクリスマスのためにボランティアスタッフが2日間腕によりをかけて豪華なクリスマス料理を準備して、子どもたちに素敵な思い出を作っていました。

クリスマスが終わるとすぐにお正月を迎え、子どもたちにとってイベント続きのゴールデンウィークとなります。元旦にはお節料理をいただき、お節料理に飽きた頃にはイーネット様からのご寄付でピザやマクドナルドのデリバリー（若者はいつの時代もジャンクフードが大好き！）。

その他にもSwitchの人生ゲームを購入させていただき、私は晴れてボードゲームの銀行役の手間から解放され、1位になってもビリになってもそれぞれの人生を楽しむことができ、すてきな年末年始を過ごすことができました。

児童相談所などの関係機関が仕事初めを迎えると、すぐに利用者たちの転居先探しも再開。次のステップへ進む準備をはじめ、それぞれ紆余曲折ありつつも無事に転居先が見つかり旅立っていくことができました。

シェルターでは利用者たちにとって制限された生活になって、息苦しい思いをさせてしまっている部分もあるかと思えます。そのことだけが生活の全てになってしまわないように工夫を随所にこらしています。季節の行事を楽しむことにホームとして力を入れておりますが、ボランティアスタッフさんやカリヨンを支援して下さるみなさんのお力添えのおかげで、より彩のある生活を送ることができ日々感謝しております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。😊

(茜の家 職員 坂爪弘樹)



## 自立援助ホーム カリヨンとびらの家

2025年3月2日、とびらの家に在籍する20歳の入居者2名のお祝いを行いました。企画時、場所や内容はどうしようか悩みました。彼らは既にお酒が好物のようで（依存が心配ですが）、お酒も良いけれど、せっかくの機会なので特別な場所で良い経験や新鮮な体験を……とっていました。理事の馬淵さんを通じてご相談し、昨年夕やけ荘の皆さんもご招待をいただいたフレンチレストラン「レストランカリヨン」が、定休日にもかかわらず特別に貸し切りでお迎えくださいました！

本当にこの「レストランカリヨン」という響きにはご縁を感じてしまいます。子どもたちにとっても、お祝いの場として同じ「カリヨン」という名前は憶えやすいですし、思い出にもなるだろうと思いました。高級フレンチのお店で、子どもたちも初体験の様子で、もちろん美味しいお料理に舌鼓をしておりましたが、実際に言葉で「良い経験になった」と話していました。20歳をむかえたひよりは3月に調理師専門学校を卒業し、この4月から就職&自活社員寮生活となった若者です。もうひよりは自活アパート訓練中の大学生、節約をしつつ自炊をし、調理に興味を持っているということです。

オーナーやシェフが直接私たちのテーブルへいらして、気さくにお話してくださったことも貴重な経験となりました。季節と食材との関係、季節と創作料理との融合等、人にとって大切な「食」に対する価値観に、また新たな発見があったように思いました。シェフのおひよりは、ご自身も若かりし頃に苦労されたこと、「でもあの時こういう先生方（とびらの家の職員）がいてくれたら俺も変わってたんだろうなあ」とおっしゃってくださいました。



私どもについてはお買い被りですが、子どもたちに寄り添ってくださり、料理のみならず大変満足することができ、素晴らしい20歳お祝いとなりました。

最後に、店内に立派に飾られていた華道の作品を見て、どこかで見たような……と置いていたら、これは西さん（とびらの家非常勤心理士兼華道家）が生けたお花（師匠との共同制作）ですよとオーナーの方に教えて頂きました。後から分かったのですが、西さんの師匠は、元々オーナーと同級生で、西さんがカリヨンに関わっていることをお知りになる前から、「レストランカリヨン」のお花を担当されていたとのこと。これは驚くべき偶然で、世間は狭いというか、これもまたご縁だなあと感思されました。

とびらの家では、一昨年より、毎月の第三火曜日、近所のパン屋さんよりパンのご寄贈を頂いています。地域のネットワーク会議で知り合った社会福祉協議会の取り計らいで実現しました。職員は曜日固定の勤務ではないのですが、不思議なことに、かれこれ10か月間くらいでしょうか、ほぼ毎回私の勤務日のご寄贈のタイミングで、パン担当職員として責任感を持って受け取りに行くことができている、なんて密かに思ったりしています。

パンは本当に美味しく、とびらの利用者たちも喜んでくれています。普段から「オレ、米派だからパンじゃないメニューを出してほしい」と話している利用者も、自らご寄贈のパンを手を取っていました。地域との関わりという点で、距離が少し近づいたような気がしました。

職員が受け取りにうかがうと、カウンターにたくさんのおパンをご用意くださっています。雨の日はお客様の足が遠のくのだそうです。とびらの家には恵みの雨……？ 少々複雑です。私が「大変なお仕事ですね」と話すと、「そちらも大変なお仕事ですよ、子どもたちはどんな感じなんですか」など、お気遣いいただきました。これからも利用者の子も若者、そして皆さんと、ささやかな気づきを大切に、関係を築いていきたいと思いました。😊

（とびらの家

職員 當麻主光）





## 自立援助ホーム カリヨン夕やけ荘

3月2日、夕やけ荘にてひな祭りパーティーを開催しました。年が明けてからバタバタ（某ホーム長の段取りの悪さから）と計画・準備を進め、きれいな花や美味しい料理で退居者を迎えました。当日の参加者は少なめで小ぢんまりとした会でしたが、お子さん連れで参加してくれた方もいて、賑やかで楽しい一時となりました。



2006年3月に開設した夕やけ荘ですが、累計の利用者数は約100人。子連れで参加しやすいイベントや、退居時期で区切ったの催し等も実施できたら楽しそうだな～と想像が膨らみます。

イベント等の案内をすると、出席がかなわなくとも近況確認ができることも少なくありません。

別の日に面会の約束ができたリ、欠席の連絡だけでも生存確認と連絡自体は拒否じゃないなとわかったりします。



「細く長いお付き合い」を利用者たちが望む限り続けられるように、これからも精進して参ります。法人に続いて、20周年イヤー間近の夕やけ荘を今年もよろしく願いいたします！🐼

(夕やけ荘 職員一同)

### 編集後記

桜の季節を通り越し、一気に初夏のような陽気が続きます。みなさまにはいかがお過ごしでしょうか。

News Carillon56号をお届けします。

巻頭にもあります通り社会福祉法人カリヨン子どもセンターは設立20周年の記念すべき年に子どもシェルターの名称を「カリヨン茜の家」と「カリヨン木かげの家」に変更いたしました。昨年末には設立20周年の記念イベントを行い、多くのみなさまが足を運んでくださいました。お越しになれなかったみなさまには当日の様子を紙面に掲載いたしましたのでどうぞご覧ください。また今号ではそれぞれの新しいシェルターからの報告に紙幅を割きました。理事長からの「あゆみと感謝」にもありますとおり、これからも子どもたちとともに、その声を受け止めながら、同じ志を持った大人たちと連携し、少しずつでも“あゆみ”を進めていきたいと思っております。

みなさまには変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

天候不順の折から、皆さまにはくれぐれもご自愛のほどお祈り申し上げます。(T.Y)

## News Carillon No.56

本誌は、社会福祉法人カリヨン子どもセンター事務局が責任を持って編集、発行しています。本紙に関するご意見、ご要望、掲載を希望する情報などがありましたら、下記までご連絡ください。

### 社会福祉法人カリヨン子どもセンター

東京都北区赤羽西3-33-3

TEL 03-6458-9120 FAX 03-6458-9121

2025年4月24日発行（無断転載はご遠慮ください）